

# 平成25年度（第28回） 農業総合研修会

日時…平成25年12月3日（火）  
場所…札幌市 北農ビル19階

挨拶

一般社団法人 北海道地域農業研究所 副理事長・所長 黒河 功

長谷川理事長がTPP全国集会へ参加のため上京中でございますので、代わって開会の挨拶を申し上げます。会員の皆様には年末を控え何かとお忙しい所を研修会にご出席を頂き、心より御礼申し上げます。



今年は春先の低温・日照不足により、農作業に記録的な遅れが生まれて、出来高が大変心配されましたが、その後の天候回復もあり水稲は作況指数一〇五、畑作物も地域によつて格差はあるものの平年並みだと聞いております。他方、生乳では取引価格が引き上げられたものの戸数の減少や暑さの影響で牛乳生産量が低迷いたし

ました。飼料など生産コストの増加もあり、厳しい経営状況にあります。こうした中、TPP交渉や米政策の変更がマスコミの報道が先行する形で進み、生産現場には不安と混乱が広がりました。各地の政策の立案とその推進にあたりましては、生産現場の実態・実情を十分踏まえた丁寧な対応が求められると思えます。

さて当研究所におきましては、本年度は、北農中央会・各連合会・行政・関係機関から委託を頂きまして、受託研究が一件、共同研究が一件、自主研究が一件であり、課題数にしまして合計一九件の調査・研究に取り組んでおります。今後とも農業情勢に的確に対応したタイムリーな調査研究に取り組む所存でありますので、皆様の負託に応える事業を推進してまいりたいと思っておりますので、引き続きご指導とご支援のほどをお願い致

します。

また今年は、日本と韓国の農業研究者の学术交流二〇周年ということを記念致しまして、『日韓地域農業論への接近』と題する研究書が出版されました。さらに足掛け四年に渡る資料の収集、編纂の結果『北の大地に挑む農業教育の軌跡』も出版されました。これは今、この会場の受付の方で展示しています。どちらにも大変意義のある研究書であり、当研究所として出版助成を致しました。ぜひご一読頂きますようお願い致します。

本日の農業総合研修会には、講師として札幌学院大学教授の小内純子先生をお招きいたしました。小内先生のご略歴につきましてはお手元の資料に記載しておりますが、当研究所の協力研究員として、ロシア関係をはじめ、それ以外の調査研究にも取り組んで頂いております。お忙しい中講師を引受けて頂いた小内先生には感謝申し上げます。

さて昨今におきましては、米やアイスクリーム、チーズ、L牛乳など、高品質な北海道の農畜産物の輸出拡大に期待が寄せられています。これは日本の人口減少が進む中、新たな需要開拓の道とも言われています。しかし現状では価格が高いため、販売先は一部の富裕層に限られ、輸出拡大には日本食の紹介、その魅力の発信の他、輸出先の市場調査と生産販売コストの低減など、地道な取り組みが必要となります。本日は「ロシア極東地域の農業と食生活」と題しまして、小内先生からロシア情勢、極東地域の農業・食品の流通事情、人々の暮らしと食

生活・食習慣のほか、今後の極東地域との交流や、北海道農業への期待などについて、貴重なお話を頂けるものと思っております。お忙しい中、講師を務めて頂きます小内先生には重ねて御礼を申し上げます。またご参加いただいた皆様に感謝を申し上げて、開会のご挨拶と致します。ありがとうございます。



講演

ロシア極東地域の農業と食生活

札幌学院大学

社会情報学部  
大学院地域社会マネジメント科

教授 小内 純子

はじめに

ただ今ご紹介に預かりました札幌学院大学の小内です。この講師を打診された時には、調査報告のちよつとした学習会と思つて気楽にお引き受けしたんですが、事前に「一三〇人くらい集まっています」と言われてちよつと焦りました。今日はいずれでも皆さまのお役に立てるようなお話が出来ればというふうに思っております。

そもそもこの報告は、北海道農産物協会さんの方から地域農研に委託された調査で、名称は「農畜産物の新たな需要創出（輸出拡大）に関する調査研究」に関するものです。二〇一二年～二〇一四年の三カ年の調査に協力研究員として私が参加させて頂いたということで企画されたものです。もう一年残つて

いますが、昨年二〇一二年は八月二四日～二八日まで、サハリ州のユジノサハリンスク市を中心として調査に行きました。今年度は、二〇一三年八月三日～九日まで。沿海地方のウラジオストク市からハバロフスク市へ調査に行きました。

本日はこれまでの二年間の成果を報告させて頂きたいと思えます。私の専門は地域社会学なので、まちおこしなどに関心があります。あまり経済の難しい話というのではありませんので、現地に向いて短い期間ですが人々の暮らしを観察することを通して見えてきたことを中心にお話したいと思えます。

報告は、①農業の現状と関連機関の取り組み、②小売形態と食料・商品の流通事情、③人々の暮らしと食生活・食習慣という三本の柱で進めたいと思います。

三地域の特徴を最初に押さえておきたいと思うのですが、ユ

## 小内 純子(おない じゅんこ)氏



## &lt;学歴&gt;

- 1980年3月 北海道大学教育学部卒業  
 1981年4月 北海道大学大学院教育学研究科修士課程入学  
 1989年3月 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位  
 取得満期退学

## &lt;職歴&gt;

- 1989年4月 北海道教育大学非常勤講師  
 1992年4月 札幌学院大学社会情報学部専任講師  
 1995年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授  
 2003年4月 札幌学院大学社会情報学部教授  
 2004年4月 札幌学院大学大学院地域社会マネジメント 研究科教授(兼任)

## &lt;主な業績&gt;

- 『釧路内陸部の地域形成と観光マーケティング』創風社 2006年(共編著)
- 『スウェーデン北部の住民意識と地域再生』東信堂 2012年  
(共編著、2012年度地域社会学会・学会賞<共同研究部門>受賞)
- 『北海道社会とジェンダー』明石書店 2013年(共編著)

ほか多数

ジノサハリンスク市は二〇〇〇年に入ってからここ一〇年間くらい、天然ガス開発等、いわゆるサハリンプロジェクトというものが行われて、急成長してきた都市です。沿海地方のウラジオストク市は極東における経済と物流の中心地と位置づけられます。ハバロフスク市は極東の政治と金融の中心地と位置づけることが出来ると思います。

少し地図で確認しておきたいと思います(地図1)。見にくいかもしれませんが、サハリン州でウラジオストク市がここです。ウラジオストクがここで、ハバロフスクがここになります。稚内からはサハリンは非常に近いのですが、札幌を起点に見ると、この三都市は大体八〇〇km以内にあるということで、同じくらいの距離にある都市です。ウラジオストク市にはモスクワまで続くシベリア鉄道の最終駅があり、我々はこのウラジオストクからハバロフスクまで八〇〇kmくらいあるのですが、十一時間くらい夜行のシベリア鉄道で移動しました。なかなか得難い貴重な経験でした。

次に人口規模についても抑えておきたいと思えます(表1)。サハリン州は全体で五〇万人くらい。ウラジオストク市には一八万二千人、全体の三七%ほどがここに住んでいます。沿海地方は一九五万人です。ウラジオストク市に五九・二万人というところで、三〇%ほどがここに住んでいます。ハバロフスク地方が一三四万人で、ハバロフスク市に五七・七万人というところで、ここは四割近くが市に集中しています。

GRP（地域総生産）に占める農業の比率は、それぞれ一〇%、四・四%、六・九%となっておりますが、ハバロフスクが農業が一番盛んだといことではなく、他のところは鉱工業や商業が盛んということで、こういう結果になっています。何れにしてもそれほど農業が大きな比重を占めている地域ではないといことが出来ます。極東の農業の中心のひとつは沿海地方で、もうひとつが、道銀さんが進出しているアムール州になります。それから極東全体では、人口はかなり減少してきています。



地図1 3つの都市の位置

表1 人口、農業比率

サハリ州	人口	49.5万人
ユジノサハリンスク市	人口	18.2万人
GRP(地域総生産)	産業別比率	農業 1.0%
沿海地方	人口	195万人
ウラジオストク市	人口	59.2万人
GRP(地域総生産)	産業別比率	農業 4.4%
ハバロフスク地方	人口	134万人
ハバロフスク市	人口	57.7万人
GRP(地域総生産)	産業別比率	農業 6.9%

一九九一年にソ連が崩壊していますが、前年は八〇〇万人くらいでした。いまは六三〇万人くらいに減っています。これは旧ソ連の頃は、極東に住むといろいろな手当が付いていたらしいのですが、それが無くなったということも影響しているのではないかと言われています。極東全体でも、特にサハリンの人口が減少しています。

次に、三都市の雰囲気を押さえておきたいと思います。ユジノサハリンスク市はとても清掃が行き届いた都市だという印象を受けました。舗道も広くてあちこちに黄色と緑のツートンカラーのゴミ箱があつて、日本だとあまり道路にゴミ箱を置かないというのが普通になっていると思いますが、ゴミがゴミ箱から溢れているということもないのです。朝はオレンジのユニホームと思われるベストを着た方が清掃をしていました。やはりサハリンプロジェクトが始まってから、お金が落ちるようになってきたということでも整備がすすんで進んでいるのではないかと思います。実際にしばらくサハリンを離れていて戻って来た方も、整備されてきているということはおっしゃっていました。

ウラジオストク市の人口は六〇万人弱ですが、坂が多くて、狭い地域に密集して住んでいるという感じがします。車も多く、特に金曜日の夕方は、帰宅する人と後ほど話しますがダーチャという簡易別荘へ向う人でかなり渋滞する街だそうです。シベリア鉄道の最終駅があるところですよ。

またウラジオストク市内の公園など方々に写真のような有料

トイレが置かれていて、必ず女性が一人いて、入りたい人はその女性にお金を払います。だいたい高齢の女性なんです。トイレを掃除して、暇なときは本を読んだりしています。これは高齢女性の雇用を創出しているのだろうかと思いつつ見ているのですが、ウラジオストク市ではそれが印象深かったですね。

ハバロフスク市は、人口では二万人くらいしかウラジオストク市と違わないんですけども、平坦で広い所にありますので、すごく雰囲気は広々とした感じがしていました。方々に花が飾られていたり、教会も比較的新しく、美しい街だと思いました。アムール川が流れる地域で、当時はちょうど洪水の時期で、非常に水嵩が増していました。私はたまたま一九九九年に一度ハバロフスクに行つたことがあり、当時はもう一回訪れるとは全然思つていませんでした。

一九九九年はソ連が崩壊して一〇年経つていなかったのですが、その時は本当に荒んだ感じで、新しいものは何もない中古の世界だという印象がありました。それを思うと本当に変わったという感じを受けました。すごく豊かになってきているんだなという印象です。以上が前置きで、どんな所かというところ



有料トイレ

を皆さんにお伝えしてから、最初の柱の方に入っていきたいと思えます。

## 一・農業の現状と農業機関の取り組み

農業がどういふふう営まれているかというと、ロシアには三つの生産形態があります。一つは農業企業です。これは株式会社などの会社経営の団体で、ロシアの統計をどれくらい信じていいのかわからないということがあります。二、〇〇〇haとか、そういう大きなものもあるようです。国営のものもあり、元のソフホーズもこれに含まれます。

二番目が農民経営で、販売目的で経営されている個人農場です。フェルメルなどと言われますけれど、これが一番日本の農家に近く、一〇〇haとか二〇〇haくらいあるものも多いようです。いま日本で農業法人などが増えてきていて、そのようなものを想定して頂ければいいかと思えます。

三番目が住民経営といって、自家消費を主な目的に経営される農場です。農業企業労働者の住宅付属地経営や都市住民の市民菜園、後から説明しますがダーチャなどという自家消費用のものからなります。そこで収穫されたものが余ると、後から出てきますがバザールなどでも売ったりします。

崩壊後はもちろん農業企業・農民経営を育てたいと思つたと思うんですが、やはり崩壊して農業に対する保護がなくなつて

表2 サハリン州の農業生産形態別農業生産高(2010年)

単位: 百万ルーブル、%

		農業生産高 総額	うち農作物	うち畜産
農業企業	実数 比率	2,600 (34.0)	1,191 (26.2)	1,407 (45.3)
農民経営	実数 比率	495 (6.5)	346 (7.6)	149 (4.8)
住民経営	実数 比率	4,561 (59.6)	3,014 (66.2)	1,547 (49.8)
計	実数 比率	7,656 (100.0)	4,552 (100.0)	3,104 (100.0)

資料: サハリン州の社会経済情勢に関する報告書  
(ただし、北海道サハリン事務所『サハリン州の概要』より作成)

しまったこともあつて、農民経営は衰退してしまい、近年は農業企業と住民経営に二極化してきているというふうに言われています。

このロシア農業の最大の特徴は、実はこの住民経営がものすごく重要な位置を占めているという点にあります。これはサハリンのデータ(二〇一〇年)ですけれど(表2)、農業総生産額の約六割がこの住民経営で占められています。日本でいえば

市民菜園とか個人の自家菜園とか、そういうものが六割も占めているということ。農業企業が三四%で、さっき言った衰退しているという農民経営はわずか六・五%です。

畜産の方は農業企業の方が四五・三%なんです、農産物になると六六・二%は住民経営で栽培されています。ですからある意味、自給自足的な所があります。こちらは沿海地方のデータですが(表3)、作物別に見ると役割分担があつて、

農業企業の方は肉とか、卵、とくに穀物(麦、トウモロコシ、米)なのですけれど、九六・四%を占めています。ところが牛乳や馬鈴薯や野菜になると住民経営が非常に強く、多くを生産しています。野菜はキャベツ・人参・キュウリ・トマトなど様々なものですが、ロシアの場合は夏の間は自給野菜を食べて、不足する冬になると安い中国野菜を食べるということになっています。

「ダーチャ」というのは何なのかというと、簡易別荘と家庭菜園の名称です。家から離れた所にあり、元々は六a程度を無料で配分されたらしいのですが、今では規模拡大などをして一〇aとか一七aとかいう人もいました。元々、旧ソ連時代にコルホーズやソフホーズの構成員が、自分個人副業的に営んでいた農業生産がルーツだと言われています。非常に多種多様な野菜や果物、花卉などを栽培していて、余った野菜などをバザールで売るケースもあります。近年、一部でダーチャ離れの現象もあっていわれていますが、その点については後で触れたいと思います。

写真左はサハリンのダーチャです。右はハバロフスク、元々ダーチャだったんですが、行って見たら今は一般住宅として利

表3 沿海地方の農業生産形態別の農業総生産に占める比率(%)

	牛乳	肉	卵	穀物	馬鈴薯	野菜
農業企業	25.1	71.5	76.2	96.4	10.1	31.0
農民経営	9.3	3.2	0.3	1.8	8.9	17.1
住民経営	65.6	25.3	23.5	1.8	81.0	51.9

野菜: キャベツ、人参、ビーツ、きゅうり、トマトなど



サハリンのダーチャ      ハバロフスクのダーチャ



国営農業企業 サハリン/サブプリチニー農場  
農地200ha・温室55棟



元ソフホーズの農業企業  
経営面積5000ha・乳牛約1200頭・従業員150人

用しているとのことでした。いずれも年金生活者がやっていて非常にきれいです。サハリンのダーチャの人は五月位に来て一〇月位まではここで暮していると言っていました。花が多いんですけれど、野菜も非常に多様で、温室も二つくらいあって、トマトなども栽培されていました。バーニヤというロシアのサウナみたいなものが敷地内にあつたりもしました。

一方、農業企業ですが、国営と元ソフホーズの大きく二つに分かれます。写真二段目は国営の新しい農業企業で、非常に国が力を入れています。サハリンのチプリチニー農場と言って、

この農地は二〇〇haくらいですが、温室が五七棟あつて、そのうち二棟はひとつ一haくらいの大規模なものです。見せて頂きましたが、ずっと温室が並んでいて、中でトマトが栽培されています。ほとんど自動になっているようでした。レタスも栽培されています。ずっと機械が動いて来るんですね。だんだん育つにつれて動いてきて、一番端つこのところで収穫をするというような形でレタスの栽培をしていました。直売所も併設されています。このような形で近代的な温室野菜栽培がサハリンで行われていました。

その一方で、元ソフホーズの農業企業はひどいものというか、余り見せたくないんだらうと思うんですが、サハリンで一つだけようやくインタビューをさせて頂きました。女性経営者はここ二五年間くらい設備投資をしていないと言っていました。写真下段左はじゃがいもを掘っているんですが、機械もあるのですが、ピークではないから今は人海戦術でという感じの人が掘っていました。

経営面積は、五、〇〇〇haくらいで、乳牛を約一、二〇〇頭、従業員が一五〇人位いるそうです。牛舎は日本で言えば四〇年くらい前の設備を使っているような状況でした（写真下段右）。除草機が無いということで、草の中に



キャベツが生えているという感じで、古いハウスなども見せて頂きました。女性経営者はインタビューの間中、国の農業政策に対する批判を延々として、やはり経営は赤字続きのようでした。

穀類とか畜産などの農業企業に、国は手厚く補助をし始めているようですが、元ソフホーズのようなどころではなかなか苦戦をしているということがあります。このようにロシアの農業というのは、日本から見れば非常にいびつな感じもしました。

そういう中で我々は、いくつかの農業関係の機関を訪問することが出来ました。まず最初にウラジオストク市にある沿海地方農業・食料局という所に行きました。極東地域というのは基本的に農業の後進地ではあるんですが、やはり中国の影響や東アジアの存在感が増えているということで、ロシアも極東重視の方に舵を切り始めているということです。農業の振興も二〇〇六年くらいからかなり行われるようになっていて、沿海地方でも、二〇〇八年から二〇一二年、さらに二〇一三年から二〇二〇年を目指して、いろんな国家プロジェクトに乗っかって農業開発計画や、様々なプログラムが展開してきていました。特に、最大の関心事は、土地改良、設備の近代化、品種改良、研究交流、それと環境に優しい農業、持続可能な農業ということにあります。

品種改良については次の訪問先の方で説明したいと思いますが、やはり環境に優しい農業とか持続可能な農業ということに

関しては、中国の存在というのが非常に大きいようです。先程話したように、冬場はどうしても野菜が足りないのが中国産に頼らざるを得ないということなんですが、中国産の安全性に疑問があるということ、いろいろな逸話を聞きました。食中毒にもかかりますし、病院に行くと「中国のミカンにあたったんだねと医者も堂々と言いますよ」ということです。一番驚いたのが、人参を洗ったら色が落ちたということ。要するに見栄えを良くするために色を塗っているということなのでしょうけれど、そういう問題があります。

もうひとつは、中国から野菜が運ばれてくるだけではなく、中国人がかなり入って来て、ロシアの農地で野菜を生産するのです。そしてそれを売る。そうすると、ロシアの政策を全く無視して農薬や化学肥料を多投したりして、地力が無くなった状態でまた違う土地に移って行くということが問題になっています。そのようなこともあり、環境に優しい農業というものに対して非常に関心を示していました。ただ、じゃあ中国はダメかという、やはり中国なしでは成り立たない。冬は中国産野菜に頼らざるを得ないし、一方では土地を借りてくれて貸借料を払ってくれる。お金を落としてくれる。そして観光客も九割は中国人ということで、中国なしでは成り立たないという矛盾を抱えている様子が垣間見られました。

次に行ったのが、ウスリースク市というウラジオストク市から車で二時間くらいのところにある沿岸地方農業研究所です。

工事中とかで舗装されていない悪路を、日本だと一時間くらいで着くと思われる距離を二時間かかって行きました。

沿海地方農業研究所は、日本の農業試験場のようなところで、先の沿岸地方農業・食料局の局長は、極東農業の心臓部というふうに表現していました。主に品種改良などを行なっていました。農産物や果実を取捨選択して品種改良を行ない、将来的な技術開発が行われています。

一九九一年にソビエトは崩壊していますが、崩壊以降二〇年くらい、土地改良とか品種改良というのはほとんどやってこなかったそうです。それを何とか取り戻そうということで、二〇二〇年くらいを目指して品種改良などに熱心に取り組んでいるようでした。目下の一番の関心は大豆のたんばく質の含有量を上げることです。日本並にするとということだと聴きました。ロシアの大豆一〇〇gあたりのたんばく質含有量は三八〜四〇%くらいなんです。それを四五%くらいまでもつていきたいということでした。それは日本で輸入している大豆は、遺伝子組み換えの問題があるということで、ロシアは遺伝子組み換えをしていないこともあって、日本への輸出の可能性も大きいということ。大豆の品種改良について非常に熱心です。ジャガイモではウイルス性の病気が非常に多いので、品種改良をして強い種子を作りたい。また、米の単収を上げたい。今は一ha四トンくらいを六トンまでもつていきたいと聞きました。

実際にやっている試験圃場は、ちょうど水害で水浸しになっ

たため見せられないということで、小さな試験圃場を見せて頂きました。米はジャポニカ米もインディカ米を直播栽培しています。

品種改良を二〇二〇年くらいまでにやりたいということで、そのために日本に対しても研究交流とか、技術交流をしたいということ。熱く語っていました。「なかなか日本は堅くて情報をくれないが、秘密にしておきたいような情報はいらなからごく普通の生産技術について教えてほしい」ともおっしゃっていました。

あちこちで、日本から人はたくさん来るけれどなかなか物事が進まないということを言われました。実効性のある研究協力をしたいんだと強く言われました。

グローバルな視点に立てば、ここを中心に一〇〇kmの半径に二億人が住んでいるわけだから、米だって麦だって大豆だって足りない筈だということ。一生懸命力説されていました。

次に同じウスリースク市にある国立農業教育アカデミーというところに立ち寄ることができました。農業の専門学校を統括する学校です。ここにも四五〇〇人位学生がいるそうです。毎年四二〇人分の学費が国の補助により無料になるそうです。それを埋めるように努力をしているということでした。五つのコースがあり、一番人気は獣医で、二番目が農業機械だそうです。ただロシアも日本と同じように、農業は重労働だけど給料は安いということ。若い人から敬遠されており、後継者不足です。

何とかやっている人が自信を持てるような農業をにしたいんだということ、一生懸命取り組んでいるようです。ここでもまた若い人たちの文化・スポーツの交流も含めて国際交流をしたと言っていました。実際に国際交流や国際会議も開いているということでした。環境教育を重視しているんだということも言っておられました。

このようにロシアでは、とにかく遅れている品種改良や新しい技術の導入、農業技術の刷新にもものすごく関心を持っているという状況にありました。

## 一・小売形態と食糧・商品の流通事情

次に二つ目の柱に移っていきたく思うんですが、どういふような形で生産物が消費者まで届くのかというのを見ていきます。

ロシアには五つの小売形態があります。一つ目がキオスク（スタンド）、写真上段のようなスタンドが街の方々にあって、いろいろ売っている雑貨屋タイプとたばこ専門店とか、牛乳専門店のような専門タイプのものがあります。



キオスクたばこ専門店



キオスク 雑貨屋タイプ



マガジン



バザール

特にサハリンに多いような気がしました。小さな窓口から商品とお金を交換するという形です。

二つ目は、マガジンで写真中段左は最新のものです。食料品など様々なものを扱っていたのですが、商品は手に取れないような形が一般的だったみたいです。今はコンビニ形式のものが増えており、日本のコンビニのように自分でカゴに入れてレジに行くというようなものが多くなっています。

自由市場（バザール）は、昔は屋根が無かったようですが、



スーパーマーケット

政策的に屋根を付けなきゃダメというふうになって、屋内か簡易店舗のような形で売っています(写真下段)。住民経営で栽培され余った野菜も売られています。ブローカーのような人が

住民経営のところへ買いつけに来るそうです。ハバロフスク人は、その人に野菜を預けて、バザールで売ってもらっていると、いうふうに言っておられました。次はスーパーマーケットです。サハリンにわりと古くからあるお店の外観です。最近はずごく大きなスーパーマーケットが郊外に展開していて、写真右は大きなスーパーマーケットのチーズコーナーです。品ぞろえは、日本のデパ地下と遜色がないくらいものすごく豊富でした。物資が不足しているというかつてのロシアのイメージからは程遠く、極東で店舗も持っているVLMとというスーパーは二万五千点の商品をそろえているということでした。

このほかにデパートがあります。元々庶民の買物というのは、マガジンとバザールが中心だったのですが、最近ではスーパーマーケットが非常に発展してきて、スーパーマーケットにお客さんが流れているという感じがしました。ただ安全・安心なものを買うために、バザールに行きつけのお店があり、その商品なら安心して買えるということで買物に行くこともまだまだあります。ですから、マガジン、バザール、スーパーマーケットというのが日常品を買うための店舗ということになります。

チプリチーニ農場には、一〇店舗ほど直売所があります。多少高いんですけど、安心・安全ということで、そのお店には朝行列ができたりするそうです。

以上のような小売り店舗の中で日本の商品が売られているのは、スーパーマーケットとマガジンです。品揃えはかなり豊富で、私は本当に驚きました。ユジノサハリンスクよりもやはりウラジオストクとかハバロフスクの方が多かったです。生鮮食料品というのはほとんどないのですが、日用雑貨とか賞味期限の長い食料品というのがたくさん売られていました。

今日の朝調べたら、一ルーブル三・一円でした。三倍すれば日本円になります。日清のカップヌードルは三六〇円。多くの商品はだいたい日本の商品の価格の二、三倍はするかなという感じで売られていました。ただ、ビールはなぜかそんなに高い感じはしなかつたですね。



スーパーの日本の商品

スーパーマーケットの陳列棚には日本のラーメンの下に韓国のラーメンやカップヌードルが並んでいます。日持ちしますから日本の飲料水も結構ありました。ビールは残念ながらアサヒビールが独占状態でした。今、ロシアの若者はウオツカを飲まなくなり、ビールやワインを飲むようになってきているそうです。



鯧のバラ売り

左下の写真は大きなスーパーマーケットにある鯧のばら売りコーナーです。また、特設なのか常設なのかはわかりませんが、一カ所だけ、スーパーの一角に日本語のポスターが貼ってあって、鳥取の柿とスイカ、広島のみかん、産地は不明ですが

んごも置いてありました。スイカは、七、二〇〇円ととんでもない高値がついていました。サハリン訪問時にちょうど北海道フェアをやっていて、その時にスイカが九〇〇ルーブル、二、七〇〇円で、メロンが六〇〇ルーブルで一、八〇〇円くらいで出っていて、全部売り切れていました。それも補助が出ての価格らしくて、実際日本から持って行くとかかなり高くなります。私は「これは誰が買うんですか、売れるんですか」と、後から出てくるSENKON社という商社の方に伺ったら、「誕生日とかパーティーのお土産に幾つかは売れるけれども、あまりたくさんは売れません」というふうにはおっしゃっていました。今回結構、鳥取県産が眼に付きましたね。残念ながら北海道は、今回は一カ所だけ日本国総領事館に「北海道レター」というニュースレターが置いてあったのを見ただけで、北海道はこれからのかなという感じで、あまり見かけませんでした。

日本商品が売られているもう一つの形態がマガジンです。ウラジオストク市には最近できた新潟県のアンテナショップの「団欒」という日本製品の専門店がありました。店の規模は三、五〇〇㎡くらいなのですが、瀬戸物、洗剤、日用品の消費期限の長い食料品など様々なものが陳列されていました。その他にも街中を歩いていると、日本商品の専門店をみかけました。ウラジオストク市には「こずえ」という店が、二軒はありました。中は全部日本製の商品です。

ハバロフスク市にも「桜」という雑貨店屋があつて、こちら

表4 流通事情—ユジノサハリンスク市—

- ・ 複雑怪奇は流通機構、個人的なつながりが重要
- ①日本の農産物を運ぶルートが確立していない
- ②店頭と並んでいる日本の商品の流通経路が不明
- ③通関に時間がかかる
- ④価格が日本国内の3倍ほどに跳ね上がる
- ⑤袖の下など流通事情に不透明な部分がある
- ⑥法律が煩雑な上に頻繁に変わる
- ⑦冷凍の保税倉庫がないなどインフラが不備

（表4）。道のサハリン事務所だとか、稚内のサハリン事務所だとか、実際にスーパーを出されている稚内市の経営者と、手伝っているロシア人のブローカーの方からお話を伺えたのですが、「サハリンはもうとにかくどういうルールで日本の商品が入ってくるかわからない。時間は掛かるし、とにかく不透明な部分もあり、法律はしょっちゅう変わる。インフラも整備されておらず、どうしようもなく、個人的なつながりだけが頼

も、ちよつと韓国製品が間違えて混じっていましたがそれ以外は全部日本の商品が店を埋め尽くしていました。「売れ筋はなんですか？」と聞いたのですが、「桜」では、「まんべんなく売れますよ」というふうに言っていました。いろいろな所で聞くと洗剤や紙おむつ、調味料とか焼き肉のタレなどが売れるようです。

以上のような状況をおさえたうえで、まず流通事情はどうなっているのかということを見たいと思います。

ユジノサハリンスク市、サハリン調査の時には、「ロシアの流通機構は複雑怪奇」、どこに行ってもそういうお話でした

良くなってきましたよ」と商社の複数の方がおっしゃっていました。もちろんまだまだいろいろ問題はありますけれども、崩壊した頃に比べれば良くなってきたというようです。いくつか日本の商品を扱う商社があつて、そこで受託してディーラーに流すというような経緯で、日本の商品が流れていくということがわかりました。

このSENKON社というのは、仙台に本社があるのですが、二〇〇五

りだ」ということです。そのブローカーの方と稚内のスーパーの社長が信頼関係を持つて事業を進めていきました。ロシア内部にそういう人がいないと難しいよという、とにかく個人的な繋がりが重要ですよということをサハリンでは嫌というほど聞かされました。そのつもりで行ったらウラジオストク市の方はちよつと違つていて、「そういう時代もあつたけれどだんだん

表5 流通事情—ウラジオストク市—

**流通機構の近代化の進展**

日本からの商品を扱う 商社

ex) SENKON 社

本社 仙台市

2005年10月31日設立

- ①倉庫業
- ②運送取扱業
- ③物流コンサルティング業
- ④販売代理業
- ⑤代金回収業

```

graph TD
    A[販売委託者 日本企業] --> B[受託者 SENKON]
    B --> C[ディーラー]
    C --> D1[卸売]
    C --> D2[卸売]
    C --> D3[卸売]
    D1 --> E1[小売]
    D2 --> E2[小売]
    D3 --> E3[小売]
    
```

SENKON社を介した商品の流れ

資料: SENKON社のHP

問題点: 輸送費が高い、保管・輸送システムが不十分

年ロシアに子会社を設立しました(表5)。倉庫業や運送取扱業などをやっているそうです。むしろちゃんと正式なルートを通らないとスーパーで商品を並べてもらってないというような言い方をしたので、サハリンとは違い、少し近代化しているのかなという印象を受けました。

それでもやはり日本人が社長だとなかなかうまくいかないというところで、SENKON社は賞味期限の長いもの、日用雑貨などは、VLロジステイクス社というロシアの会社の子会社みたいな感じで、社長はロシアの人ですよという形で商品を卸しているということでした。ただ、日本の自治体を持ち込む生鮮食料品などは、先程のスイカのようなものはSENKON社から直接卸すという二ルートです。

むしろ今回の調査では、商品の流れよりは輸送の方が問題だということが結構言われました。非常に輸送費が高い。倉庫がきちんとしていなくて、保管などがなかなか難しい。その方が言うには、ロシアはハードを持っている人が強いからなかなか価格競争が起きなくて、輸送費が下がらないそうです。シベリア鉄道なども輸送費は高いそうです。今はトラックで運んだりもしているそうですが、生鮮食料品は、小型の保冷トラックがあまりないということもあって、ウラジオストクからハバロフスクまでは無理で、商圏はウラジオストクかせいぜいナホトカまでだというふうにおっしゃっていました。そういうような状況で、むしろ輸送を問題視している方が複数いました。

ですから道銀さんの試みというのも、生産することはできるのだけれども、もう一步その後どうするのか。つまり作ったものを運ぶという、その所が結構大きなハードルになるんじゃないかということを言われていました。

これは余談なんですけど、鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンターというのは、実はSENKON社が受託しているのです。二〇一一年から鳥取の産業振興機構、県の外郭団体のような感じなんですよけれども、海洋センターというウラジオストク駅の隣の非常に立地のいい所にあるんですが、ここが請け負って、農産物のスイカやナシを年に二、三回くらい出したり、鳥取ブランド展を開いたりしているそうです。ですからさっきのスイカや小さなのぼりもSENKON社が配布したとおっしゃっていました。それでちよつと鳥取県が目立つというのもあると思うんですが、そんなような形でやっているということなんです。ただどのくらいビジネスとして上手くしているのかというのはなかなか見えてきませんでした。

もう一つ私には誰が一体こんな日本の商品を買うんだろうというのが、素朴な疑問としてありました。

じゃあ日本人が買うのかというと、日本人はそんなに住んでいないわけです。在留邦人数で外務省の統計(二〇一二年)では、ユジノサハリンスクで六八人、ウラジオストクで一〇四人、ハバロフスクで七八人。ということは日本人ではなく、やはり現地のロシア人が買うんですね、二倍も三倍もするものを買う

ということですね。それはやはり日本の製品に対するすごく強い、信頼感があるからです。

ウラジオストクですから、中古車とかですね。ロシアの人は自分で修理をしながら乗るんですけれど、そういうことで長く乗れるとか、或いは、商談で日本に行った時に食べたものだから、使ったものだとか、そこで接した人の印象から親日的になるようです。日本の製品は値段が高いが質はいいという評価が一般にあります。

ただ、さっきのカップラーメンの写真にもありましたけれど、韓国商品も伸びているようです。特に三・一で、一時的に日本の商品が入ってこなかった時に、韓国商品に乗り換えた人がいて、それで安いけれど質もまあいいじゃないかというところで日本商品に戻ってこない人もいます。ですから、いつまでもこのような状況が続くかどうかかわからないようなところもあります。

韓国製品は、パッケージ面でも日本より良いと言われている、ロシアの人は色が割とはつきりとしたものを好むらしいんです。韓国もそうですよね。民族衣装とかを見ていても日本と韓国は色の使い方が違うなと思います。あと当然日本語は分りませんから、商品の解り易さという点でちよつと日本の商品パッケージは劣るというようなことをおっしゃっている人がいました。

表6 人々の暮らしと生活水準

・ 名目平均賃金(露国家統計庁データ)	
サハリン州	4.45万ルーブル/月
沿海地方	2.75万ルーブル/月
ハバロフスク地方	3.09万ルーブル/月
・ 低すぎる名目賃金	
① 共稼ぎである	
② ダーチャを持っている	
③ 貯金をしない	
④ 生活は横ましい、外食はしない	
⑤ 統計にあらわれない収入がある	

### 三・人々の暮らしと食生活・食習慣

ここから第三の柱の方にも入っていきたいと思います。ではロシア人の生活水準はどのくらいなのでしょう。露国家統計庁データによりますと、名目平均賃金というのがあって、サハリン州で四・四五万ルーブル、沿海地方が二・七五万ルーブル、ハバロフスク地方で三・〇九万ルーブルとなっています。これを三倍して一番多くても一三万ルーブルくらいです。沿海地方だったら、八、九万ルーブル程度の給料ですよ。サハリンは四・四五万ルーブルで一番高いんですけれども、サハリンプロジェクトで入ってきた人たちが一〇万ルーブルくらい貰うらしいので、平均するところになります。

実際はこれよりも少ないこともあるようです。

例えば現地案内人や運転手さんに聞いても、むしろ「こんなに貰ってないよ」とか言えます。学校の先生なんか二万五千ルーブル位だよとか言うんですよ。車つて中古車でも二〇〇万円くらいにして、みんな殆ど、特にウラジオストクは車の所有率が高





いですし、家賃を聞いても四人で郊外に住んでも一〇万ルーブルくらいするということです。レストランも結構人が入っているし、これは何なんだろうかというふうに思いました。

サハリンの場合は、高級住宅地では柵があつてちゃんと守衛さんがいて中には入れないんです。柵の向こうにお金持ちが住んでいる。住宅地も分かれているくらい二極化しているような状況でした。

これら名目賃金が低すぎるということで、機会があるごとにあちこちでいろいろな人に聞いてみました。様々な意見がありました。共働きだから、ダーチャを持つているので食費はそこで補える、あとは貯金をしない。これは最近は変わってきているようですけれども、銀行におちおち預けていられないというところもあり、とにかく使つてしまふ。家を建てる時も、お金が貯まると途中まで建てて、お金が無くなるとやめて、また貯まるとその続きを建てる人もいるそうです。貯金をしないから、あるだけ使つちやうんだということですね。

それから、生活が慎ましいということとは言つておられました。後から外食も普及してきたというお話もするんですが、私が接したロシア人の方は、自分で作つて食べるという人が多かったです。統計に表れない収入があるとい

うのが一番まことしやかでした。例えば、先ほど言つたダーチャで作つて余つた物というのは販売して収入になっています。白タクもけっこうあるようです。

そういう何か統計に表れないような副収入があるのだろうということは何か統計に表れていました。今でもどうしてこういう給料なのかということはわかりませんでした。統計的にはこのようになっています。

それと、我々の調査に先立ち、ちょうど七月二六日に北海道主催で「ロシア極東販路開拓セミナー」というのがあり、その中の資料に出ていたのですが、ロシアの各都市部で中間層が台頭してきているという結果が報告されています。この戦略研究センターで言う中間層の定義は、①自動車購入は可能だがマンション購入は難しく、年収三万ドル(三〇〇万円)以上、②マンションまたは新築戸建を購入できる、年収三〇万ドル以上という二つの層の合計となっています。

地域別世論調査結果というのが出ており、それによりますと中間層は二〇一一年度にサンクトペテルブルグが一番多くて二五%、それからモスクワが一九%、ウラジオストクが三位で一八%、四位がハバロフスクと他三都市で一六%。サハリンは載つておらず、ユジノサハリンスクはわからなかつたのですが、四位までには入っていないということです。先ほどの平均賃金というのは、都市ではなく州全体ですので、農村部も含めた賃金ということになるわけですけれども、都市部の中に年収三〇

○万円以上の中間層がもだんだん成長してきているという事がこれで窺われます。

それとダーチャというものが変化してきているということも、生活スタイルの変化の一つと言えるのではないかと思います。

崩壊後の混乱期のロシア人の胃袋を満たしたのは、このダーチャだと言われ、生きるための食料の確保というのがダーチャの位置づけだったんですが、だんだん安全な食料の確保のためということがポイントになってきました。その他休息や趣味のため、日本人の市民菜園と同じように、そういうものに変わってきているとも言われています。これも全ロシア世論調査センターの調査結果ですが、実際にロシア全体でダーチャを所有していない人が二〇〇五年の四九%から、二〇一二年には六〇%へ増えているそうです。特に若い世代に顕著というか、先ほどお見せしたサハリンのダーチャを所有している方も、「息子達はまだもうやらないと言っている。自分の代だけだ」と言っていますし、運転手さんや現地の案内の方も、「前は持っていたけれど、今はやっていないよ」と言っていました。

我々が見学できるのは年金生活者が所有している所ですが、普通は働きながらダーチャを維持するわけです。種を蒔いたりする忙しい農繁期には、仕事から帰って来てから車で二〇分くらい離れたところにあるダーチャに行って作業をするというところで、時間的・肉体的に非常に負担が大きくダーチャ離れが進んでいるということのようでした。

ダーチャの仕事というのはそれだけではありません。だいたいの女性の仕事のようにですが、時季が来ると冬用のピクルスを作るためにキュウリやトマトを酢漬けにする作業も入ってくるので、それも非常に大変だということも耳にしました。

それから、ダーチャが減っているというのは、ダーチャが一般住宅地に転用されているという面もあるようです。先ほどのハバロフスク郊外でもそうでしたが、都市に人口が集中して行く中で、もともとはダーチャだったものを一般住宅に切り替えている所がありました。ハバロフスクでは工場の中にダーチャがあり、周りの環境が非常に良くないという理由で作られなかったり、ここはもともとダーチャだった所だよという住宅地なども見せてもらいました。要するに、物が豊富になつてきていますからお金がある人たちは買えればいいという状況が生まれて、ダーチャ離れが進んできているということです。ただ、ウラジオストクの女性ドライバーの方は「ダーチャ離れというのはお金持ちの息子の話であつて、我々はダーチャがないと生活できない」と言っていました。その方は一〇年位前まではダーチャ離れというのはあつた。作つても盗まれたり、ダーチャに行くまでの交通機関があまり良くなって嫌になつてやめた人がいたけれど、むしろ今はダーチャ回帰の動きもあるというようなことを言っていました。消費生活が豊かになつてくる中でお金が入用になつてくると二極化して、ある程度生活水準を維持していこうと思つたら、やっぱりダーチャは手離せないよと言う

層もまだまだいるようです。そう単純なことではないと感じました。

次に「外食の広がり」についてです。基本的に庶民はあまり外食はしないというのですが、ハバロフスクで大衆的な日本食レストランの経営者にインタビューすることができました。外食をする人が少しずつ増えてきており、変化を感じるということを抑っていました。このお店は「東京」という名前のお店でしたが、開業してまだ二カ月くらいで珍しさも手伝つてか、「深夜一時まで開けていても客が絶えない、予約が絶えないような状況にあるし、お店によつてはランチに行列ができるところもありますよ」ということで、外で食べる層というのも増えてきているようです。

では一体、外食した場合どのくらいお金を払うのかと聞いたところ、昼食で二〇〇〜三〇〇ルーブル（約六〇〇〜九〇〇円）。今の日本ではもつと安く、ワンコインで済みますこともできますよね。夕食で一人あたり五〇〇〜七〇〇ルーブル（約一、五〇〇〜二、一〇〇円）くらい、一、〇〇〇ルーブルが限界だということを抑っていました。カフェとレストランではリンクが違うらしいのですが、地元のカフェではだいたい一〇〇ルーブルあればピロシキとちよつとしたスープを食べられるので、日本食レストランは少し高めであるという事は確かです。ただ三〇〇ルーブルくらいまで支払つても昼食を外で食べるという層も出てきているということになりますね。こう見ると、実

際の給料はいくらくらいなんだろう、どういう金回りなんだろうという疑問はまだまだ尽きないですね。日本食はイタリア料理に続いて二番目の人気だそうです。一番の人気メニューは巻き寿司で、二番目がラーメン、あとはいろいろなものだと仰っていました。ロシア人には量が足りないのではないかと思いましたが、お昼に寿司などを食べても三〇〇ルーブルくらいでした。

日本食レストランというものがどのような感じなのかを見ておきたいと思います。ユジノサハリンスク市で六、七軒でした。日本人シェフがいるお店が二軒、その一つ「ふる里」、もう一つは日本の統治時代のユジノサハリンスクの地名でもあります。「とよ原」というお店でした。残りはそこから独立したお店だと言っていました。日本人シェフのいるお店の方が人気があるようです。サハリンで地元ロシア料理などのレストランにも行きましたが、この日本料理店が一番混んでいました。

それからウラジオストク市に九軒あります。日本人シェフのお店は「とよ原」がこちらにも二軒あるので、それを二つとカウントすれば三年前にできた「恵比寿」と合わせて三軒ありました。そしてハバロフスクは一〇軒で、日本人シェフはいないということでした。先ほどインタビューした経営者は、「うちのシェフも日本人の料理人の所で修業してきていますよ」と強調していましたので、日本料理は日本人シェフに習つて作られているようです。刺身などもあり、我々のために「ふる里」の



衣を付けて揚げた巻き寿司



焼き魚定食

ご主人が特別な料理を作ってくれました。ちょうどこの時期、八月はロシアの松茸が出るという事で、松茸料理なども出してもらいました。日本で食べるより大味な感じはしましたが、日本からの買い付けも来ているそうです。

写真上段右はウラジオストクにある、日本人が経営する「恵比寿」と、左は日本国総領事館がある建物の二階にあり高級な感じの「とよ原」です。「恵比寿」は大衆的な感じで、お

客さんは我々以外はロシア人でした。ここに鳥取県をPRする小さな幟が置いてありました。寿司の盛り合わせや蕎麦など、本当に何でもありました。下段右の写真はハバロフスクで食べた焼き魚定食で、美味しか

つたです。

左は先ほど言った「東京」という店の寿司で、人気のメニューは「サムライ」という名前の、海苔の替わりにサーモンで巻いたクリームチーズの寿司でした。

写真下段左は「東京」の看板メニューの衣を付けて揚げた巻き寿司で意外と美味しかったです。このようにロシア流にアレンジした料理もありました。値段はやはり日本の二、三倍でした。ここで、唯一「サツポロビール」の名前を見かけました。

日本食レストランや日本料理が増えているから、食材も日本ものを使っているかと言うと、現地産を使っているんですよ。日本食レストランが増えたことが日本のビジネスチャンスになるかという、そうではなく、やはりコストが合わないということがあるそうです。見本市などで、いろいろと良いものはあることもわかりますが、コストが合わない。ウラジオストクで日本人料理長のいる「恵比寿」と「とよ原」に商談には行くけれども、やはり日本の商品を使ってもらうのは難しいとSENCON社の方は言っていました。「ラーメンのタレだけ卸している」そうです。日本食ブームがあっても、そこからビジネスチャンスが広がるかと言うと、ちょっと難しいだろうという感じを受けました。

以上駆け足で見えてきましたが、一〇年前に私が訪れた時と比較すると、二極化の傾向はあるけれども、確実に豊かになってきていると感じました。ライフスタイルも少しずつ変化して来

ています。街でファーストフード店はあまり見かけませんが、郊外の大きなスーパーマーケットの上の階にあるフードコート等には、日本食を含め様々な飲食店があり、そこで家族が食事をするという、そのような外食が広がっていると確信しました。ファーストフード店も好きずきがあり、「全然使っていない」という若者もいましたが、「忙しい時は食べるよ」という人もいて、スーパーマーケット内のマクドナルドのようなファーストフード店を利用する若者も増えています。

先ほど言ったように、ウォッカ離れも進んでいるし、ダーチャ離れも進んでいるということ、少しずつ人々の暮らしが変化してきていると感じました。こうした動きを敏感に把握して対応していく必要があるのではないかと思います。

#### 四．まとめ

それでは、まとめに入っていきたいと思います。五つくらいありますが、今まで話してきたことの振り返りになります。まず一つ目、ロシアの農業というのは我々から見るとすごくいびつな感じがすると何度か言いました。農業企業と住民経営への二極化が非常に進んでおり、農民経営が衰退してきているということは大変問題です。ロシアの政策は、特に大企業と農民経営の方にもテコ入れをするという動きがあるのではないかと思います。



そういう中で品種改良、土地改良、農業技術などへの関心というのが非常に高まってきているということですが、そして設備の刷新、農業機械を高度化したと。日本との人的交流、技術的交流を非常に望んでいました。「ロシアの農業は大規模と思われるけれど、そうでもない

い。北海道の農業技術をロシアでもっと生かせるのではないか」と言っている方もいらっしゃいました。そして環境に優しい、持続可能な農業への関心や、先ほど何回も出てきましたように、極東の人口が減っている中で中国人が押し寄せてくるという脅威、そういう危機感も相当あるようですが、中国人はお金を落してくれるという良い部分もあるようですが、そうでもない部分もあり、日本に対しては、とにかく実効性のある交流をしたい、早く人を送りこみたいという要望が一部でありました。北海道とは気候も似ているので、その点からの北海道農業に

対する期待は大きいと感じました。しかし、一方的な関係というのは長続きしないと思うので、お互いにwinwinの関係が構築できるようなものを、どのように作っていくのかが重要になってくるのではないかと思います。

二つ目です。市場としての可能性はどうかということですね。やはり率直に言つて、生鮮食料品の大量輸出はちよつと難しいのではないかと印象を受けました。なぜかと言うと、価格が二、三倍も高いということですね。先ほどスイカのお話の時に言い忘れましたが、日本のスイカは七、二〇〇円、その隣で地元のスイカが三五ルーブル、一〇〇円くらいで売られていたんです。また、中国のものは地元のものよりさらに安いんです。「日本から持つて行くと、価格の六割が輸送料のコスト」という文書も読んだことがあります。ところが、一部の富裕層しか購入できないことになりました。ところが、人口はそれほど多いわけではありません。サハリンで五〇万人、極東全体で六三〇万人くらいですので、そこに大量に売るといふことは非常に難しいということが、我々調査団の一致した意見です。

先ほど言つたように、日本食レストランも日本産は良いものだという事はわかっているけれども、コスト的には無理だということ、ハバロフスクでも、物は全部モスクワから入ってくると言っていました。最初にウラジオストクで訪れた沿岸地方農業・食料局長が、「日本の業者でスイカやメロンを輸入して

売っているところはあるけれども、あくまでもこれはニツチな市場であつて、多くの人は中国から入ってきている価格の安い物を買います」と言っていました。所得の高い階層を狙ったニツチ産業にすぎない、その通りだと思いました。ですから勝算はどうかという感じを受けました。

確かに安心や安全という意識は非常に高いのですけれども、三倍する物を買うための付加価値としては不十分だという指摘も受けました。私たちでもそうです。確かに道産牛は良いとわかつていても、横にオーストラリアやアメリカの安い肉がある場合、道産牛を毎回買うかと言つたらそうではなく、回数を減らしたり、たまには価格の高い道産牛を食べようという感覚であつて、安心・安全だけでは三倍の価格差というのはなかなか埋められないと感じました。

それから、これは今日の講演の中であまり言いませんでしたが、食習慣の違いを考える必要があるというアドバイスもいろいろ受けました。例えば北海道の人がアスパラガスを持つて行つて売ろうと思つても、あちらでは庶民にはアスパラガスを食べる習慣がないということです。ある時、鳥取の柿を売り込もうとした事があつたらしいのですが、ロシアでは柿は熟して軟らかいものをスプーンで食べるのが一般的らしく、鳥取の固い柿がスパーにあつても、固い柿が甘いとは思わないそうです。同様に、ネギを売ろうとした時に、緑と白の部分があるかなかなか売れなかつたということがありました。日本に帰つ

て来てネットで調べたところ、確かにロシアのネギは緑の部分  
がすごく多いのです。白い所が多いのでネギが売れなかったと  
言っていました。

それから玉ネギとリンゴ。この二つは  
そこそこ売れると言われました。日本の  
玉ネギは大きいのですが、ロシアでは小  
さな玉が調理的に好まれるそうです。し  
かし、日本の玉ネギはすごく日持ちする  
ということ、高くても結構売れると  
言っていました。リンゴも同様に、ある  
程度日持ちするという理由もあると思っ  
ます。ヨーロッパなどではリンゴを丸か  
じりで食べるので小さいリンゴが好まれ  
ますが、最近のロシアでは農業の関係で  
リンゴの皮を剥いて切って食べるという  
ことが割と広がってきているらしく、リ  
ンゴは売り込める可能性があると言っ  
ました。ですから、向こうの食習慣にな  
い物売り込もうと思つたら、試食や何  
らかのキャンペーンと抱き合わせないと  
なかなか売れないのではないかという感  
じを受けました。

日本の商品だけを扱っているマガジンやスーパーがあり、そ



れらが一応経営として成り立っている以上、日用雑貨や賞味期  
限が長い食品の可能性はあると思います。それは、日本の商品  
には高い信頼があるからです。「私の祖

母はカムチャツカ半島に住んでいます、  
そこでお風呂用品は全部日本のものを  
買っているよ」という人がいました。

子どもが小さい時、紙オムツは全部日  
本製のものでした」とも言っていました。

例えばトイレの消臭剤も結構売れるん  
ですね。臭いが良いというのもあります  
が、日本の物は三週間ぐらいいちます。

高くても、それだけの期間もて別に高  
くはないわけですね。あるいは紙オムツ  
も、赤ちゃんが気持ち良く過せる時間が  
長ければ別に値段が高いとはならないの  
で、そのような付加価値があると結構高  
くても売れるのかなという感じがしまし  
た。先ほど言つたように、韓国製品の追  
い上げもあつて安穩としていられますん  
が、日本の商品に対する信頼度は非常に  
高いということです。

それから価格を少し安くしたらどうかというアドバイスをし  
てくださった方もいらつしました。つまり完璧な物じやな

くても良い、多少質が落ちても良いと。スイカは真丸じゃなくても良いし、メロンだつてネットが綺麗じゃなくても良い。そこで価格を二倍くらいに抑えるなど、そういう努力をしたらどうかと。日本人は、品質に対するこだわりというのがたくさんあります。ロシアには日本のこだわりに対するいろいろな逸話があるそうです。例えば、日本人がリンゴを作る時に一つひとつ袋をかけるのは驚きらしいですね。「ロシアではリンゴがなつたら嬉しいし、虫がついたら吹き飛ばせば良いという感覚なんですよ」と言う方がいらつしやいました。一方日本では味には関係ないけれど、キュウリは真直ぐじゃないといけない。そういうところで多少手を抜いても価格を下げるようなことをしてみてもどうかとおつしやつた方もいます。

稚内との関係で言えば、フェリーの運賃を少し安くして、ロシアから買物に来てもらう。船で日本に来て買物をし、大荷物を背負つて帰る方が結構いるそうです。ロシアで売り込むより日本に来て買ってもらおうというような工夫の方が意外と良いのではないかという事を言っている方もいました。ですから、その辺りをどう考えていくかということでしょうか。

三つ目に流通システムの問題があります。サハリンもこれからだんだん変わつていくと思います。先ほど言つたように、少なくとも昨年私たちがサハリンに行ったときには個人的な繋がりが大事で、物流の仕組みはさつぱり分らないと言つていた人がほとんどでしたが、ウラジオストクの場合は、商社を介し

た流通システムが定着してきています。もちろん日本のようにスムーズに行かない部分もありますが、かつての混乱期に比べると流通は良くなつてきました。関税を通すのも短期間でできるようになつてきましたし、ちよつと煩雑ですが手続きさえ踏めば、生魚も輸入できるようになつてきています。ただやはり、輸送コストがかかる・倉庫や保冷設備がないというのがむしろ大きな問題だということが今回の調査では非常に印象深かつたですね。「ロシアも少しづつ世界標準になつていきますよ」という言い方をされている方もいました。

二〇一二年、ロシアはWTOにも加盟しました。ある商社の日本人が仰つていた言葉から「トラウマからの脱却を！」と書きました。これは、ソ連が崩壊して間もない頃、日本の企業はビジネスチャンスだと思い、ロシアの方々と共同で事業をした結果、会社を乗っ取られてしまったという苦い思い出が脳裏にある。今でも日本の企業はロシアに対して非常に悪いイメージを持つています。トラウマになつている。怖い所だというネガティブな評価がありますが、この方は「自分もそう思つてきたんだけれども、実際に来てみたら全然違う現在のロシアの姿をきちんと見て、昔のトラウマは捨てて判断した方が良いでしょう」と言つておられました。「日本から来ている人はちよつと勘違いしている。日本人が商談を持ちかけたらロシア人は皆喜ぶと思つている。そんなことはない、日本ほど扱いにくい国はない」と、ロシア人ではなく日本人が言つていました。その例



に出たのが、しじみです。「中国や韓国はそのまま持つて行きますが、日本は同じ値段で買うにもかかわらず、L・M・Sに分けてくださいと要求する。そういう日本の商慣行というのは世界標準じゃないんですよ。見下すようなものではなくて、対等なビジネスの相手として見たほうが良いのではないですか」というアドバイスを言っておられる方もいました。

四番目は、ライフスタイルの変化についてです。これまで何回も言ってきたことですが、生活が安定して確実に豊かになってきています。特に都市部では、中間層もいてダーチャ離れや外食の習慣、つまりお金を払って物を買ったり食べたりすることがロシアの中で徐々に広がってきているということです。そういう意味ではビジネスチャンスが広がっている部分があると思います。

最後になりますけれども、五つ目として、私がこの二年間、特に今年、極東地域の人達は本当に親日的だということにとっても驚きました。サハリンは北海道といろいろな関係があるので、サハリンの方には「ウラジオストクやハバロフスクに行ったら、こうはいかないよ」と言われましたが、今回実際に行ってみると大変親日的でした。それは、向こうにいる複数の日本人が、「日本に対する評価は高すぎる、過剰すぎると思う程である」と言っています。日本人に対する評価が高く、ロシア全体としてはわかりませんが、極東は親日的な地域です。しかし、日本人のロシア観で親しみを感じないというのが八二・九%を占め

るというデータがあります。これは日本のマスコミにも問題があると向こうの方が言っていました。ロシア問題と言うと、どうしても領土問題になってしまいますよね。その方が言っていたのは、「例えば三・一一でロシア軍は日本の自衛隊が救助に行かない所に行き、地元の人に大変感謝された。それはロシアで放送されたけれど、日本では全然報道されません」と。そういう部分に加えて、かつてのソビエト時代のイメージや小説のイメージなど、いろいろあると思いますが、非常に親的な地域なので、我々もロシア観の転換を図っても良いのではないかと強く思いました。もちろん一方でいろいろな問題はあるでしょうけれども、我々はすごく歓迎されたという印象を受けました。今後は両国にとって本当に良い関係が築かれるようにな交流をしていければ良いと思います。そういう言葉で今日の話締めたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

## 質疑応答

入江 小内先生、どうもありがとうございました。先生は社会学を専門とされており、農業者や消費者、生活者の視点から研究活動を続けておりまして、今日もそういった視点から大変貴重なお話を聞かせていただきました。これから若干の時間ですけれども、質問なり感想なりお受けしたいと思えます。最初に、ロシア極東地域への輸出拡大の調査を委託いただいた農産物協会の武田会長がいらつしやいましたら、感想でも質問でも結構ですのでお話しただければと思います。

武田 ただ今ご紹介いただきました、北海道農産物協会の武田でございます。実は昨年からロシア極東地域の調査研究の委託ということで、地域農研さんをお願いしてまいりました。

その前は台湾、タイ、シンガポール、香港、この地域についての需要創出・輸出拡大の調査研究も委託してまいりました。今回はこういう形で皆さんの前に成果を発表して頂けるということで、我々にとっても大変ありがたいことであります。今後北海道農畜産物の輸出拡大、農業あるいは農畜産物のグローバル化という



ことは避けられない事態だと思っておりますので、この北海道農業のため、さらなる調査研究を続けて参りたいと思っております。今日はそういった意味で、ロシア極東地域の一部のことではあります。こうやって発表させていただき、心からお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

入江 武田会長、どうもありがとうございました。それでは会場の皆さんからご質問をお受けしたいと思います。発言の際には所属とお名前を仰つていただくようお願いしたいと思います。それではどうぞ。

中兼 道庁の中兼と言います。北海道の農産物をロシア極東に輸出するとすると、値段を今の三倍から二倍くらいまで下げないと駄目だという話でしたが、それはともかく、味の面ではどうなのか。向こうで食べられた物は現地産の物が多いと思

いますけれども、現地で食べられた物やスーパーに並んでいる物に比べて、やはり日本産の方が美味しい、北海道産の方が良いよねというように見えたのかどうか一つ。それからもう一つ、現地の方は遠慮して言わなかったのだからと思えますが、放射能による日本の商品に対するイメージ低下はあるのか。向こうの日



本人の方から何かお聞きになったかをお尋ねします。

入江 ありがとうございます。小内先生、二つの質問ですけれども、お願いします。

小内 ロシア料理は美味しかったですけど、日本から輸入された物は特に食べなかったです。現地のスイカは、よくヨーロッパにあるような水っぽい感じのもので、食べ慣れていない人には日本のスイカの方が美味しいかなと思いましたが、三倍払ってまで味の違いがあるかと言えば、どうかなと思う所はありました。

放射能の問題については、現地の人や案内人、運転手さんから直接言われませんでした。放射能という言葉が一回だけ出て来たのが、沿海地方国立農業教育アカデミーの方でした。安全で環境に優しいもの、放射能問題も含めてそれは東アジア全体で考えていかなければいけない問題なのだというお話の時に出てきただけで、特にその事について調査中に言われた事はなかったです。関心がないのかわかりませんが、こちらから話題にしなかったこともあり、特にありませんでした。それによる不安なども聞きませんでした。

入江 ありがとうございます。その他いかがでしょうか。



橋本 私は北海道農政事務所の橋本と申します。現地で売っている物の写真をを見せていただきましたが、その中にインスタントラーメンの棚があり、上が日本製品で下が韓国製品だったと思います。この価格差というのはどれくらいだったかご記憶にございますか。

小内 一般的に半分だと言われています。韓国製品は日本製品の半額だということです。カップラーメンだと日本製で三八〇円くらいですが、韓国製だと一九〇円くらいだと思います。

橋本 ありがとうございます。

入江 その他いかがでしょうか。

久田 日本人の持つロシアイメージの悪化に責任を持つている日本のメディアの一角にあります、北海道新聞の久田と言います。今日は、現地の写真を交えて非常に面白い貴重な情報をいただきましたありがとうございます。すごく雰囲気伝わってきました。質問ですが、農業生産は、ダーチャと企業に「二極化」していると何回か仰っていました。ダーチャは減っているんですね。

小内 そうですね。

久田 これは企業がすごく増えているということでしょうか。

小内 住民経営と農業企業に二極化しています。どちらかというと農民経営が衰退していることだと思います。住民経営はダーチャだけではありません。ダーチャに、市民菜園や住宅付属地経営も入れて住民経営と言うのです。なお、ダーチャを持っていない人の数が増えているというのは統計的に出ているので、ダーチャは減っているということです。

久田 では、ダーチャ以外の住民経営は増えているという事ですか。

小内 そこはちょっと統計的にわかりません。

久田 もう一つ関連でよろしいですか。ダーチャの非保有率が四九%から六〇%に増えていきますよね。これは全ロシアの数字ですか。分母は全世帯数ですか。

小内 二〇〇〇年位に全ロシア世論調査センターで行ったアンケート調査の結果だったと思います。ロシアは農業統計も含めて信頼できる統計があまりないと言われておりますが、これはアンケート調査ですね。結構大規模なものだったと思います。

久田 都市住民だけの数字じゃないということですね。

小内 そうですね。

久田 農家を含んでいるわけですか。その他はダーチャを持っていないですよ。

小内 そうですね。その調査対象者の方の比率、ダーチャを持っているかということに対しての比率において、持っていない人が高まったということですね。対象者に農家の方も含まれているので、その数がどうなのかというのはちょっとわかりません。

久田 都市の住民がダーチャを持っているという率はだいたいこのくらいだと見て良いわけですね。つまり四割くらいが持っている。





小内 ウラジオストックの局長さんに聞いたときは、「ダーチャをやっているのがウラジオストックでは半分くらいだよ」という言い方はされていましたがね。それを統計的にくださいと言ったらホームページにありますと言ってはぐらかされ、もらえませんでした。ダーチャのことを何度も伺ったところ半分くらいですよという回答でした。

久田 ありがとうございます。

入江 その他いかがでございましょうか。

斉藤 元地域農研の斉藤と言います。先生のお話、非常に興味深く聞かせていただきました。スライドの二七枚目にあります、様々な農産物に対するロシアの人たちの考えが整理されていますし、これは非常に興味深く見させていただきました。

総括として、「安心・安全だけでは付加価値として不十分」、そして「生鮮食品の大量輸出は難しい」というところが結論じゃないかと思えます。これは農産物協会さんにとって、なかなか厳しいという事だと思えます。問題は、このような状況の中でどういう展開をしてここを打破していくかということを考える必要



があるということだと思います。

例えば、二〇年前になりましたけれども、「香港で農産物を売れ」という事で私も香港に行きました。その時に、中国もそうでしたが、サラダを食べる習慣がなかったんですね。そこに北海道の甘い大きな玉ネギを持って行って、サラダ文化をなんとか根付かせたいという形で展開してみたところ、オーストラリアやアメリカから来ている玉ネギの三倍、四倍の価格でも「同じ玉ネギではない」という評価で売れたのです。こういうような事を、観点を変えて是非この続きとして後押ししていただきたいと思えます。

小内 どうもありがとうございました。

入江 それでは、太田原先生の質問で最後にしたいと思います。

太田原 研究所の顧問をしております太田原と申します。今日は大変貴重な解説、ありがとうございます。特に最後のまとめの方で、極東地域の「遅いけれども着実な変化」は大変大事なご指摘で、こちらも少し時間をかけて対応しなければならぬのかなと思えました。お聞き

したいことは、北海道銀行が大きな農場を極東地域に造りました。あれはどういう役割を果たす事になるのか、現地で見られているのか、その辺りについて何かお気づきになられた事があつたら教えていただきたいと思うのですが。

小内 先ほど少し申しましたが、ロシアでは余っていて使われていない土地がたくさんあるので、土地は提供してくれるそうです。ただ、作ったその後が問題だと聞きました。農場があるのはアムール州なので、そこから運ぶのにお金がかかる、倉庫は無い、どこに売るのでか。先ほど言った物流の問題が大きいのではないかと思います。ロシアは、土地はほとんどん使ってくださいと言いますが、その後の手当てというのは全然してくれないらしいです。そのあたりがこれからの問題ではないかという事をたくさん聞きました。

太田原 先ほど「北海道農業への期待」というお話があつたのですが、そういう生産技術についての向こうの期待というのはかなりあるのでしょうか。

小内 新しい国営企業は別ですけども、それ以外のところは北海道の農業機械に対して非常に関心を持っていると思います。ロシアの農業規模は非常に大きいイメージがありますが、意外とそうでもないのです、北海道の技術をもつと活かせるので

はないかと仰っていました。北海道は気候的にも似ていて、サイズ的にも適合するのではないかと仰っている方もいらつしやいましたね。

入江 ありがとうございます。それでは以上で質疑応答を終わらせて頂きます。小内先生にもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございます。

以上をもちまして本日の研修会を閉じさせていただきます。地域農研ではこうした研修会や様々な調査研究事業に取り組んでいきたいと思しますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願います。本日はありがとうございました。

